

装飾文様研究史(1)

— 明治期以来の文様集成および伊東忠太の文様史研究 —

山 本 謙 治

キーワード

装飾, 文様, 研究史, 伊東忠太, 文様集成, 装飾空間

I はじめに

美術史学のジャンルにおいて、絵画史・彫刻史・建築史などに比べれば文様史の研究は非常に少ない。少ないだけでなく従属的、補助的に扱われる傾向も強く、二次的な研究領域であるといっていよい。その理由のひとつには文様自体がもつ従属性をあげることができよう。文様そのものは自らのはっきりとした歴史展開をもっているにもかかわらず、施文される被装飾物があって初めて存在するのであり、文様のみでは存在できない。

しかし研究者にとってもっと実際的な理由としては、文様の種類と数があまりに膨大であること。それに対して、文様資料——文様の一部だけではなく、文様全体の配置構成が分析できる全体資料と単位文様を分析できる細部資料——この両者の資料を合わせて蒐集するのが難しいこと。さらに文様自体の制作時代は推測できても、文様によって被装飾物の制作年代を決定することは困難であること。そしてなにより文様史という研究領域において問題化すべき対象と方法が曖昧であったからであろう。

さらにそうしたことは別に、モチーフを分類し、特定モチーフの文様作例を少しでも多く蒐集し、それらを配置構成や文様構成法により分類していくという反復作業の中で、文様史研究がより本質的な問題を見失って矮小化してしまったことがある。こうした文様史の矮小化を防ぐには、文様史が本来は装飾文様

史であることを強く意識しておかねばならない。装飾と文様という場合、文様の方に過剰に重心をかけていくと、個別文様のモチーフや構成法に埋没してしまい、文様研究は行き詰まる。

文様を考察対象にしながら美術そのものの発展史に道をつけたリーグル『美術様式論』の副題が「装飾史の基本問題」であったことを思い出さなければならない。文様史は、『文様史<装飾史<美術史』の関係で認識され、そのための研究方法が模索される必要がある。むろんこうした作業の前段階としては、わが国における文様研究の歴史を跡付け、問題の所在を明確にしておかねばならない。

冒頭に他のジャンルに比べて〈文様史〉の研究は極めて少ないと述べたが、〈文様〉に関する論考は膨大な数になる。考古遺物、金工、漆工、染織、陶磁、建築装飾、さらに各時代に渡って文様は存在するのであるから、個別の文様作例に関連しての論述が膨大になるのは当然である。いま試みに〈文様〉をタイトルに含む1970年以降の論考をMAGAZINEPLUSで検索してみると、それだけでも568件に及ぶ。こうした個別文様の研究をつないで装飾文様史全般に渡る研究史を輪郭づけ、跡付けることは不可能にも思えるが、実際には個別文様を論じて文様の史的展開にまで考察が及んだ研究は必ずしも多くはない。本稿では〈文様〉ではなく〈文様史〉に関するわが国明治以降の研究を整理してみる。

II 文様集成について

わが国における学術的な文様研究は明治30年代に建築史家伊東忠太(1867～1954)によ

って始まる。明治期の文様史研究では伊東以外にはやはり建築史家である塚本靖などの建築装飾研究が注目される程度であるが、その一方で非常に多くの文様集成が刊行されていることに留意する必要がある。

それらは図案家のための図案資料であり、大半は単位文様を描き起こした単なるパターン集であり、文様自体ないしその構造を、歴史的、系統的に分類し、体系的に把握しようとする姿勢のものではない。しかしながらこうした図案集成は、現代でもデザイナーのためのデザイン資料という実用的な必要性から刊行され続けており、このことは文様が彫刻や絵画の持ち得ない実用性と存在意味を持つことをよく示している。ただそうした一般への普及の功績と同時に、これら図案集成によって、文様が装飾という觀念から切り離され、単体の個別文様、個々のパターンとしてのみ取り扱われるようになったことも事実である。こうしたことが、わが国において、文様の本質を装飾芸術の視点からとらえようとする風土を失わせる一因となったともいえよう。

1. 明治期

明治期における木版文様集成の代表的なものとしては以下のようなものがある。これらに集成された文様は、そうした文様の存在を知るには有効であるが、いずれも単位文様の輪郭を描き起こした程度の図案集成であり、所在や出典が未記載か不明確なものが多く、文様の作例資料として有効利用することは難しい。

- ①小田切春江『奈留美加多』本篇全8冊、芸艸堂、明治15年(1882)
- ②兒玉永成編『新選古代模様鑑』全2冊、明治17年(1884)
- ③村上正武『唐草模様新紋帳大全』、明治17年(1884)
- ④広田伊兵衛『古代唐草模様集』、明治18年(1885)
- ⑤京都交双会『古代模様廣益紋帳大全』全3冊、風祥堂、明治24年(1891)
- ⑥森寛斎『日本古代模様集』全5冊、芸艸堂、明治37年(1904)
- ⑦森雄山『波紋集』全3冊、芸艸堂、明治37

年(1904)、昭和38年再版。

⑧小田切春江『奈留美加多』続篇全2冊、芸艸堂、明治38年(1905)

⑨瀧澤清編『古代模様集』全3冊、明治41年(1908)

2. 大正期

文様の簡単な描き起こしを集成した明治期のパターン集は、大正期になると、精緻な模写図や実物写真を、モチーフ別ないし時代別に列挙した資料集成へと展開する。もっともモチーフ別といっても動植物など描かれた題材で単純に分けるもので、文様の構造的な系譜づけを試みるような意識はないし、時代区分も一般的な政権区分によるものでしかない。

⑩河辺正夫『日本装飾大鑑』全5冊、光村推古書院、大正4年(1915)、昭和50年(1975)新版

図案家河辺の精緻な彩色模写図600余点(多色木版刷100図)が推古・天平・弘仁・藤原・平氏・鎌倉・足利・豊臣・徳川の時代区分で列挙されるが、特に図版の解説もなく、どのような基準で収集されたかもわからない。明治期の単純な描き起こしとは異なり、その彩色模写図の質は高い。いずれの図も、実物の写真資料と対比させた場合、写真細部の不明瞭な部分を補うに十分な模写図である。

昭和50年に新版が出版され、大淵武美氏が「装飾文様の流れ」と題する概説とともに「図版解説」を書き下ろされている。「図版解説」では新たに写真資料を多く収録しており、河辺の模写図と合わせて文様作例の史的展開を見るには有用な書となっている。

⑪谷口香喬監修『古代模様』11冊、芸艸堂、大正10年(1921)

⑫建築学会編『文様集成』全25輯、大正12年(1923)

日本のみならず中国、朝鮮の建築・工芸文様をコロタイプ図版500枚、彩色木版刷図版74枚で蒐集したもの。その数には圧倒されるが、一応の名称と時代名がつけられるのみで分類や系統化はなされていない。文様細部を判別できる写真は少ないが、文様作例の存在を確認できる点は、明治期の文様集成とは異なり研究資料

として使用し得る。

- ⑬工芸美術研究会『上代文様集』1～12輯、
大正15年(1926)

彩色木版入りの120図を動物・植物・幾何学文・原始文などの題材で分類したもの。

3. 昭和期

昭和になると文様事典や文様図鑑の類が多く見られるようになり、題材分類による安易な文様名称が増えて煩雑化する一方、簡単ながら時代概説が試みられるようになる。

- ⑭大隅為三編著『萬國圖案大辞典』全21巻、
昭和3～6年(1928～31)、昭和51年(1976)
復刻、第一書房

- ⑮渡辺素舟『東洋図案文化史の研究』、富山房、
昭和26年(1951)。昭和46年(1971)に『東洋文様史』(富山房)として再刊。

本書はわが国最初の文様研究書ともいわれるが、ここではあえて文様集成のなかに加えておく。同書は幾何形6種、霊獣形10種、鳥形4種、天象・地象8種、動物14種、植物11種を取り上げ、アジア全域から作例を集めて各題材文様の歴史展開を叙述しようとしているが、地域・時代の相違や伝播経路を述べることなく作例を繋いでいく叙述方法には無理があり、結果、列挙的な解説に留まっている。渡辺が題材的な区分に重点をおくのは、「題材的な発達史的なありかたが、文様の美と価値の推移を解する上において、妥当な性質に富んでいる」(『東洋文様史』、4ページ)と考えるからである。しかしこうした題材分類による発展史的記述の欠陥は、海野弘が「文様の歴史的構造の面からはかなり不満の多いものである。たとえば文様の分類において、描かれた内容、すなわち竜とか虎とか、または花の種類などによって分けてしまうのは、文様の内在的な構造の分化をふまえていないと、ほとんど偶然的な分類になってしまう。このようなものもある」といった列挙的な文様研究の段階が日本の装飾研究の状況である(『装飾空間論』美術出版社、1973年、308ページ)と批判した通りで、この点において同書は文様集成の域にあると考えるべきであり、題材別の研究方法そのものの限界も考えるべきであろう。

- ⑯杉浦非水・波辺素舟編『世界植物図案資料集成』『世界動物図案資料集成』『世界人物図案資料集成』技報堂、昭和27年(1952)

- ⑰守田公夫『日本の文様』東京創元社、昭和28年(1953)

写真図版を中心としたもので、原始文様(縄文土器・銅鐸・杏葉の文様)、自然文様(雲文・火焰・水文・風景文様)、人物文様(飛天・天人・人間)、動物文様(獅子・龍・象・鹿・鬼文様)、鳥(鳳凰・孔雀・花喰文様)、草花文様、つる草文様(忍冬唐草・宝相華唐草・葡萄唐草・蓮唐草・牡丹唐草文様)、縞文様、その他の文様(狩猟・石畳・亀甲・蝶文様)というように分類されている。図版は文様細部の写真が多く、その点は現在でも有用であるが、分類項目はまったく体系化されておらず、解説も簡略で時代区分という意識も窺えない。

- ⑱織維意匠創作協会編『世界模様図鑑』全3巻、
河出書房、昭和29年(1954)

第1巻「世界の模様と色調」、第2巻「日本の模様と色調」、第3巻「近代の模様と色調」からなる。第2巻では原始から江戸までを8時代に分けて概説している。ただしその概説は、各時代に多く見られる題材の文様を列挙して説明するものであり、日本においてどのように文様が時代展開したのかという問題意識はみられないが、最初の文様時代概説としては注目してよいであろう。

- ⑲溝口三郎編『文様』(日本の美術29)至文堂、
昭和43年(1968)

題材的な発達史で文様叙述を試みた渡辺素舟『東洋図案文化史の研究』と好対照をなす、時代別叙述の文様通史である。「日本文様の流れ」と「有職文様・紋章」に大別し、前者では、文様のあけぼの(原始・縄文・弥生・古墳時代)、仏教とともに(飛鳥時代)、文様の花開く(奈良時代)、和風化一路(平安時代)、きびしさへの指向(鎌倉時代)、憧れは元・明へ(室町時代)、うつりゆく趣向(桃山時代)、近代への曙(江戸時代)という時代別叙述をおこなっている。いうまでもなく、こうした時代区分は当時多く出版された日本美術全集などに共通する時代把握であり、文様作例から新たに文様史としての時代区分が考えられたものではない。しかしな

がら本書以前の題材別文様集成とは明確に一線を画すものであり、わが国において初めて本格的な〈文様史〉の叙述が試みられたものと位置づけてよいであろう。本書は日本の文様のハンディな通史といった扱いで読み流すのではなく、〈文様史〉叙述のあり方を考えるために批判的精読がなされる必要がある。

⑳『日本の文様』全33巻、光琳社、昭和45年(1970)

一方、題材による列举的文様集成は、昭和45年の本全集の刊行で一応行き着くところまで行き着いたといえよう。これは題材ごとに全33巻に分けて写真資料を集成したもので、簡単な図版解説と時代を付している。文様全般にわたる資料集としては便利なものであるが、各巻末に収録される論考二編は、各巻別人による執筆であり、執筆者により文様への取り組み方に相当な開きがあり、その質もまさに玉石混交である。また、全巻を通じて文様に対する共通の問題意識が示されるわけではなく、文様史そのものを体系化して叙述しようという試みはみられない。それでもこの全集以後に刊行された以下の文様全集に比べれば、学術的にははるかに有用なものである。

㉑『原色 日本の意匠』全16巻、京都書院、昭和58年(1983)

㉒『日本の文様』全18巻、小学館、昭和61年(1986)

㉓『続 日本の意匠』全12巻、京都書院、平成7年(1995)

Ⅲ 伊東忠太の研究

わが国における学術的な文様史研究の起点は伊東忠太の研究に求められる。いうまでもなく伊東はわが国初期建築史学の泰斗であり、文様史研究は中心的な課題ではなかったであろうが、それゆえ個別文様に拘泥することなく建築装飾という大局的な視野から文様やその起源を縦横に論じている。この点が現在の矮小化した文様史研究からは魅力であり、文様を装飾史としてとらえ直すのに必要な視座や方法論を再考するに有益である。

伊東の文様史研究には飛鳥時代文様史論と奈

良時代文様史論のふたつが見られる。前者は法隆寺、なかでも玉虫厨子文様の起源が中心に展開される。後者では「奈良文様の起源」として狩猟文を中心とした起源論が展開され、さらに「奈良文様の性質」としてその文様原理や分析方法が述べられる。起源論は後世の研究において作例資料が蓄積されるにつれ有用性を失うが、文様原理や方法論はいまなお再読しても問題化すべき点が多い。

文様史に関連する伊東の主要論文は以下の8編である。

①「法隆寺建築論」(『建築雑誌』83号、明治26年〈1893〉)

②『法隆寺建築論』(東京帝国大学紀要・工科第1冊第1号、明治31年〈1898〉)

⇒⑨⑫に所収

③「天平時代の装飾文様について」(『建築雑誌』164号、明治33年〈1900〉)

⇒⑩⑬に所収

④「飛鳥文様の起原について」(『考古学雑誌』1巻4～6号、明治43年〈1910〉)

⇒⑩⑬に所収

⇒⑪に「飛鳥文様の起原について」として収録。

⑤「奈良時代模様の起源に就いて」(『考古学雑誌』3巻3.5.6号、明治45年〈1912〉)

⑥「奈良時代の文様」(『仏教美術』第5冊、大正14年〈1925〉)

⇒⑩⑬に所収

⑦『考古学講座4』「古代建築」(雄山閣、昭和3年〈1928〉)

⇒⑨⑫に「古代建築論」として収録。

⇒⑪に「法隆寺」として収録。

⑧「玉虫厨子の文様と其源流」(『仏教美術』第13冊、昭和4年〈1929〉)

⇒上記⑦の再録。

⑨『伊東忠太建築文献日本建築の研究・上』(龍吟社、昭和12年〈1937〉)

⑩『伊東忠太建築文献日本建築の研究・下』(龍吟社、昭和12年〈1937〉)

⑪『法隆寺』(創元社創元選書、昭和15年〈1940〉)

⑫『日本建築の研究・上』(龍吟社、昭和17年〈1942〉)

⑬『日本建築の研究・下』(龍吟社, 昭和17年
(1942))

1. 飛鳥時代文様史論

伊東が古建築の実測調査に基づいた最初の科学的論文といわれる①「法隆寺建築論」を発表したのは明治26年(1893)のことである。この論文を骨子として完成されたのが明治31年(1898)の②『法隆寺建築論』であり、これは後に⑨『伊東忠太建築文献日本建築の研究・上』初版に収められ、さらに再版以後は⑫『日本建築の研究・上』と改めて出版されている。

この『法隆寺建築論』では、五重塔と金堂の編において内外の装飾の項をたてているが、特に〈模様〉については「第7編 金堂内部」における次の箇所で言及している。

第1章 玉虫厨子 11. 鍔金具 13. 密陀模様

第2章 諸仏像 1. 仏像と模様

第3章 橘夫人念持仏厨子 4. 模様

第4章 壁画 3. 模様

このうちの玉虫厨子密陀模様については「須弥座の上下に施せる蓮花形の面上にはホニーサックル(忍冬)の変形を印し、台座の平面希臘式の唐草の画き、殊に其の尾垂木の挺出する部分に於ける通肘木の表面に、純乎たる希臘式のホニーサックルを見るに至りては、吾人は膝を拍ちて其の東西交通の確証を得たることを絶叫せざるべからざるなり」(⑫ 113 ページ)とわずか数行述べるだけであるが、この着想を巧みにまとめて発表した起源論が明治43年(1910)の④「飛鳥文様の起原について」である。この間、明治38年(1905)には関野貞と平子鐸嶺による法隆寺論争の火ぶたが切って落とされたが、伊東は論争には積極的に加わっていない。

伊東は「飛鳥文様の起原について」の緒言において、千種万様の文様も、系統的に編成しその根本に遡れば、その原型は意外に少数であり、しかもその発生地は大多数はみなエジプトおよび西方アジアに在るという極端な一元的起源論を主張している(⑬ 387 ページ)。

伊東は飛鳥文様の大多数は植物文様であり、そのなかでも一種特別の「から草」が種々なる変形をなして反復賞用されていることを指摘し、その「から草」をもって飛鳥文様となすと規定

している。伊東のいう「から草」とはモチーフを連続させる形式をさす形式語ではなく、特定の植物文様を意味するモチーフ語である。伊東はその飛鳥から草の作例として玉虫厨子彩色文様など6種を抽出し、これらと同種の系譜上にある作例として中国六朝期7例、中央アジア1例、ガンダーラ1例、インド2例、ササン朝2例、東ローマ2例、サラセン6例、ギリシャ7例、アッシリアおよびエジプト1例をあげて比較検討している。伊東はその結果として、飛鳥から草はギリシャおよび西方アジアで用いられたハネサックル(Honeysuckle)の変態である、すなわち Honeysuckle を起源とすると結論づけた。

現在、一般的に Honeysuckle はハニーサックルと記され、忍冬と訳されている。忍冬文ないし忍冬唐草の名称は初期文様史研究において多用されたが、戦後はパルメットの名称に代わっている。ところで伊東はこの Honeysuckle という言葉をモチーフ語としては使用していないことには注意がいる。あくまで文様の形式を示す便宜的な形式語として使用しているのであり、Honeysuckle 文様が Honeysuckle (忍冬)の花を文様化したものであるとは述べていない。しかし伊東以後の研究では忍冬文は忍冬という花を文様化したものとして定着してしまう。こうした事情は、村田治郎「玉虫厨子続考」(『仏教芸術』69, 1968年, 19~22ページ)に簡潔にまとめられている。モチーフ語と形式語の混同、あるいは使い分け意識のないことはわが国文様史研究の未成熟を示す好例であるが、伊東がこうした点においても注意深かったのは西欧の文様研究に対し十分な造詣をもっていたからであろう。

忍冬の問題はさておいて、伊東のこの起源論は、そこに抽出例示された作例があまりに少なく限られたものであること、さらにその伝播経路に関してまったく触れられていないということで、実証という点においては極めて不十分なものであった。もっともこの起源論は、日本から遙かギリシャまでの形の連鎖を喚起する見取り図のようなものであり、明治という時代にひとりの学者がこれほど広範囲に及ぶ学識を具えていたことに驚かされる。また文様史研究にお

いては、広範囲の時代や地域の作例を連続させてはじめてその歴史展開が見出せることを示し、さらにそのためにはモチーフによる系統づけの方法が必要であることを示した功績は大きい。

その後の伊東学説は昭和3年(1928)の⑦『考古学講座4』『古代建築』の項でやや詳述される。これは後に⑨⑫に「古代建築論」として収録され、さらに昭和15年(1940)の⑪『法隆寺』(創元選書)に「法隆寺」と題して、先の④「飛鳥文様の起原について」とともに再録されている。この「古代建築論」のなかで文様史研究に重要なのが「第八章 玉虫厨子と天蓋」(⑨ 259～271ページ)であり、この第八章をそのまま同文で再録したのが⑧「玉虫厨子の文様と其源流」である。

伊東はここで玉虫厨子の密陀文様と金具文様について述べているが、後の研究者が問題としたのは金具文様に対する伊東説であった。伊東は④「飛鳥文様の起原について」でみたように密陀絵彩色文様を飛鳥から草の典型例と考え、これを Honeysuckle 文様(忍冬文)と規定した。一方、玉虫厨子の透彫り金具文様についてはこれを密陀絵彩色文様と同系の忍冬文である甲類(6種)と、一見してこれらとは趣が違って見えるように見える乙類(7種)の二つの系統に大別した。そして忍冬唐草と全く別系統に見える乙類もまた忍冬唐草文の系統であり、その変化の諸相であると主張した。伊東のいう忍冬文とは今日いわゆるパルメット文のことである。パルメットはモチーフ語のように用いられることが多いが、厳密に言えば、掌状の植物文様を指す形式語にすぎない。

伊東が明らかに彩色文様と同系の忍冬文であるとした甲類文様6種のうち、現在なお純粹にパルメット唐草と見なされているのは1種類のみであり、連珠文を除いた残りの4種は中国起源の雲文系文様と考えられている。

乙類文様については、伊東はまず中国六朝時代石窟にみられる龕の尖拱帯が、中央尖端に全パルメットをおき、その左右に半パルメットを相対にならべて装飾されることを説き、「此の種手法は支那六朝時代に夥しく行われたが、日本にも飛鳥時代の仏教美術、殊に仏菩薩背光多く見られる」として、観心寺や法隆寺の光背(猷

納宝物197号)を例示した。そしてこれらが進展した図案が法隆寺金堂天蓋隅金具であるとし、「大体の図案の方針は両者と同様であるが、中心の忍冬花の手法に一変化を来し正中に猪の目形、或は倒心臓形とも云へる形の空穴を生ずるのである。左右の半形忍冬花はこの場合過半形となると同時に、その線の運用に大なる変化を生じ、頗る複雑となったのを見るのであろう」(⑫ 267ページ)と論じた。さらに法隆寺の八葉光背と上野国群馬郡清里村古墳出土金具をあげ、これらと法隆寺天蓋隅金具とは同種類の文様であるとし、その祖型として朝鮮忠清南道扶餘発見の金具を提示した。伊東はこれを百濟式の特殊な忍冬花形と解釈し、これと同種類の文様である乙類文様もまた忍冬文の変化したものであると考え、結果として金具文様すべてが忍冬唐草文の系統であると結論づけた。

伊東のいう乙類文様とは7種類あるが、伊東はこれらを乙類文様と総称して、そのうちのどれがというような具体的叙述をしていない。ただ「正中に猪の目形、或は倒心臓形とも云へる形の空穴を生ずる」ということを論点にして、同様の猪目形空孔がある作例を列挙していることからすれば、乙類文様と総称しながら、結局のところ、伊東が論じたのは須弥座腰部柱の文様についてのみであるということになる。

伊東は厨子金具文様13種を図版としてあげているが、それぞれの文様に対する個別の分析はおこなっておらず、甲類・乙類文様としてひとまとめにして論を進め、その一切を忍冬文様で割り切っている。本来はまず甲類・乙類という分類の当否を検討するべきであろうが、これを行っていないことが基本的な欠陥となっている。また乙類文様の主眼とした須弥座腰部柱の文様に関してもその造形を具体的に説明しているわけではない。そのため列挙した関連作例との比較も猪目形空孔があるというだけの指摘で、相互の造形的な連続性は印象論で終わっている。

乙類文様を忍冬(パルメット)系と主張する伊東説については、大正期より浜田耕作、関野貞などが疑問を示し、昭和になって後藤守一や小杉一雄が中国固有の龍文様の系統上に位置づける起源論を展開するが、それについては後に述べる小杉一雄の文様史研究において触れる。

2. 奈良時代文様史論

飛鳥時代文様史論が法隆寺建築の研究のなかから副次的に発展していったのに対して、明治33年(1900)発表の③「天平時代の装飾文様について」は直接に文様のみをとりあげて発表した最初の論文である。先の④「飛鳥文様の起原について」の10年前に遡るもので、伊東が研究の初期から装飾文様に関心をもっていたことが知られる。その後、奈良時代文様に関する論文としては明治45年(1912)に⑤「奈良時代模様の起原に就いて」が発表され、大正14年(1925)に⑥「奈良時代の文様」が公にされる。この「奈良時代の文様」は⑤を第1章「奈良文様の起原」とし、③を第2章「奈良文様の性質」としたもので、論旨に大きな違いはないが若干の表現の変化や付加された部分がある。

③「天平時代の装飾文様について」は文体からして講演原稿のようであるが、その「緒言」において、欧米では文様研究が重視され、多くの論説や文様を秩序的に集めた本が出版されているのに対して、日本では文様研究も秩序的な文様蒐集や分類も行われていないと指摘し、日本での装飾文様研究の必要性を強く説いている(⑬ 407ページ)。

また本論では天平文様の個別作例を取り上げるのではなく、〈性質〉〈材題〉〈組織〉〈線〉〈色彩〉などの視点から天平文様を総論的に述べ、文様研究にはどのような視座が必要であることを示している。伊東の文様史研究において現在なお意味をもつのは、起源論などではなく、こうした文様の本質論であり、文様分析のための方法論なのであるが、従来こうした点が再検討されたことはなかった。

⑥「奈良時代の文様」では、「奈良文様の性質」として以下の6項目をたてている。

- | | |
|----------|----------|
| 1) 文様の原理 | 2) 文様の種類 |
| 3) 文様の適用 | 4) 文様の布置 |
| 5) 線 | 6) 色彩 |

このうち示唆に富むのは〈文様の原理〉〈文様の適用〉〈文様の布置〉の3項目である。

1) 文様の原理

まず文様の考案には一定の原理〈文様の原理〉があるとし、文様化(conventionalize)の方法として、以下の四つの方法をあげる。

- ①自然物の複雑な形を簡単に描く省略法。
- ②自然物の形を便宜的に変化させる硬化法。
- ③自然物の形に修飾を加えて美化する修飾法。
- ④自然では一定の形のないものに形を与える賦形法。

これら四つの方法の具体的作例はあげられていないが、モチーフや文様構成法の問題ではなく、まずもって最初に文様自体の造形原理を問題化するところは、造形の本質を見据えた伊東の学識の深さであろう。こうした問題化は以後の文様研究では忘れられ、それが日本の文様研究を矮小化していく一因となる。

2) 文様の種類

自然物(動物・植物・天文地物)、幾何文、事蹟、文字文などに区分するが、体系的な分類基準は見出されていない。

3) 文様の適用

伊東は「適用するべき物体と適用する文様との調和」(⑬ 445ページ)の良し悪しが文様の美しさであり良好さであると指摘する。これはすなわち文様の施される器物と文様との調和性、例えば楽器には音響に因む文様、鏡には神聖な文様を施すといったことを問題化しているわけである。後の文様研究では施される文様にのみ関心が集中していくが、文様はあくまで施される対象があって成り立つもので、そこには対象をいかに装飾するかという大前提がある。だからこそ逆に、装飾のあり方を見ることで、被装飾物がその時代にどのように認識されていたものであるかを知ることができるわけである。ただし伊東自身は器物と文様の関係を注視すべきというのみで、直接的に装飾の問題にまでは踏み込んではいない。

4) 文様の布置

ここでは器物への文様の配置方法を問題化しているが、この項は③「天平時代の装飾文様について」で〈組織〉として述べられていた部分の方が詳しく、かつ示唆に富む。伊東のいう〈組織〉とは、題材をどういう組織に組み立てたかで、文様の配置方法のことを指しており、単位文様自体の構成方法については触れていない。伊東は文様組織を真(規則的な反復)・行(少し崩れ)・草(規則性を失う)の三種に分ける。こうした分類はいかにも美術作品を見る

場合の経験的、感覚的なものであるが、文様分析において単位文様の抽出や構成ばかりを注視していると、文様全体の質的判断が麻痺してくるので必要な視点ではある。さらに西欧流の文様配置分類法として、直線を連ねた形の Fret, 表面を一定の大きさ一定の形に区画して配置する Diaper, 散らし文様である Powdering などを紹介しているが、現在からすれば見るべきところは少ない。

しかしながら文様組織は場所に影響されるとして「その場所と組織の関係は大いに研究すべき問題」(⑬ 419 ページ)と指摘したのは卓見である。これは先の〈文様の適用〉が器物と文

様の関係を問題化したのに対して、こんどは文様の施される空間と文様の関係を問題化したわけである。文様の配置構成、さらには単位文様自体の構成法が、施される空間の形に左右されるのは当然のことであるが、以後の文様研究でこの点を問題化したものはほとんど見られない。伊東の文様史研究は、こうした文様の本質部分を考えるにおいて、いまなお有用であり、再考されねばならない。

(以下次稿)

(2004 年 11 月 11 日受付)